

050206 M1 居住者インタビュー・富田 玲子さん

インタビュアー：中村 政人 アシスタント：福田 啓作

中村（以下、N）：まずは、M1 を購入された契機や当時の家族構成についてお聞かせ頂ければと思います。

富田さん（以下、T）この土地には夫（林泰義氏）の両親の家が建っていまして、古い洋館でした。両親と、夫とその妹（林のり子さん）が住んでいまして、そこに私が杉並区から嫁いできて、子供が 2 人生まれました。とても良い家だったので、私は気に入っていたんですが、何十年か住んでいる人達には、とても気に入っている部分と、もう嫌だと思える部分が両方あって、暗いとか寒いとか不便だという面がワッと出てきて、そこに結婚して外に出て居た夫の妹が子供 2 人を連れて戻ってきたものですから、人数が一気に膨れて、二世帯上の人たちには、子供の声等はとても大変で、その古い洋館にはとても住めないから壊してしまおうというムードが高まってしまったんです。とは言え、すぐに設計して建てて等と言っているといつになるかわからないし、じゃあ最近プレファブというものがあるらしいから、それを選ぼうということになって、いくつか見て歩いて、どれもこれも嫌だと思っている時に、M1 に出会いました。M1 だったら、いかにもプレファブという感じで、全然家という感じではなくて割り切れるから、これにしましようということで割に早く決まりました。つまり、家族構成が急に変わって人数が増えたということが契機になって、それに至るまでにそれぞれの住まい手が抱いていた不満がどっと湧いて出て、パッと取り替えて新しい生活が始まるぞ、という感じでした。

N:それは何年位だったのですか？

T:1972 年です。

N:そうすると、M1 発売後比較的すぐの時期ですね。

T:そうですね。M1 が発売されたばかりの頃だったと思いますけど。

N:M1 のどのような点に惹かれたのでしょうか？

T:いかにもあっさりしていて、プレファブっぽくて、無理に家っぽくしていない所でしたね。他のプレファブメーカーのものは、プレファブなのに普通の家のように見せようと工夫していて、それが何とも嫌な感じだったのですが、M1 は車のような感覚であったという所に惹かれました（笑）。

N:M1 を購入されるにあたって、ご家族の中で話し合い等をされたと思いますが、どなたか、特に M1 を気に入ってらした方はいらしたのでしょうか？

T:みんな同じ位に気に入っていたと思うんですが、親たちはそれに従ったみたいなお所がありましたね（笑）。とにかく今の状態より良くなるんだったらそれでいい、ということでしたね。

N:通常、メーカーが用意するような形式ではなく、随分ユニークな組み合わせ方をされていますが、最初に M1 をご覧になった際に、こういった組み合わせのイメージはお持ちだ

ったのでしょうか？

T:そうですね。展示場で見たプランでは狭いし、でも聞いてみたら、どういう風にでも組み合わせられるということだったので、じゃあこれかな、という感じでしたね。当時、5つのユニットを桁方向に連結して間仕切りも取ってしまうという例が無かったので、できますか、と聞くと展示場の人はよくわからない。だけど構造を見せてもらおうと、これならできそうだと、思い、しかも大野勝彦さんの設計だということがやっとわかったので、大野さんに直接伺うと、それは簡単だということになりました。

N:1階右端部分に5ユニットあって、その上の2階に5ユニット載っていて、さらに3階があるんですか？

T:そうなんです。3階部分はM1ではなくて、木造です。本当は3階を載せてはいけない計算になっていて、それはどこかに言われちゃうんですよ（笑）。一応構造の先生には、3階が出来た後ですけれども、チェックして頂いて、そしたら、垂直荷重にはまだゆとりがあることがわかったんですが、水平の歪みが心配だと言われて、天井を剥がして、3階が載っている部分の下だけは、隅に全て火打ちを入れたのです。

N:21個のユニットを使う例というのは、あまり類例がないと思うのですが、施工時のトラブル等はありませんでしたでしょうか？

T:いえ、特に無いですね。工場や宿舎等では、ユニットがたくさん使われていた例があったと思うのですが、住宅では最大ということでした（笑）。凄く安かったんです。単価が当時の他のプレファブメーカーの半分以下、3分の1位だったと思います。

N:部屋数もたくさんありますね。

T:今、ここは「えんがわ」という店なんです。今日は休みですけど。

N:そうすると、大野さんがおっしゃっていた「無目的な箱」という思想、言い換えれば、大野さんとしては、この箱を色々な用途に使って欲しいという意図を込められていたように思うのですが、実際に住まわれて、あるいはカフェとして営業されて、その点についてはどのようにお感じでしょうか？

T:そうですね。大野さんがそのようにおっしゃっていたというのは、今初めて伺ったんですが、本当にこの家は10回以上足したり引いたりしているんですね。それがしやすいというのは、やはり柱と梁しかないこの構造がとても良いと思います。

N:10回以上ですか？

T:ええ。ちょっとした直しを入れると、多分その位いじっています。

N:家族構成の変化に対応できる、というのが当初の狙いとしてあったようなのですが、データを見ますと、実際に増改築をなさっているご家庭は少なかったみたいなんですね。そういう意味では、こちらの住宅は、大野さんの意思を非常に反映なさっている気がしますね。

T:そうですね。軽く出来ているので、間仕切りを取っ払うのも簡単だし（笑）。現在カフェとして使用しているこの部分は、元々親たちの部屋で仕切りがあったのですが、そういう

のを取ってみると、本当にあっという間に外れちゃうんですよ（笑）。壁厚が 7cm しかなくてね。コンクリートで出来ている家だとなかなか壊せないでしょうけど、ここは本当に簡単に壊せるんですね（笑）。

F:大野さんが、こちらの M1 の使い方は正解だとおっしゃっていた、という話を聞いたことがあります。

T:大野さんは 1 度も来て下さらないんですよ（笑）。何かの時に声をお掛けしてもあまり。じゃあ、今度こそ見て頂こう。

N:ご近所の方の反応はいかがだったのでしょうか？以前、こちらに建っていた洋館と M1 は随分デザインが違うので、ご近所の方の印象も違ったと思うのですが。

T:多分、評判悪かったと思いますけど（笑）。ただ、幸いにも木が周りがあるので、それで隠せば何とかなるでしょう、というようないい加減な考えでやっちゃったんですね。前の家の方が、街にとってはよっぽど良かったと思いますけど。ただ、木も相当育ってきていますから、今は外観が隠れていますけど。

N:そうですね。当時は木は・・・。

T:ええ、もっと低かったのです。

N:M1 の問題点等はありませんでしたでしょうか？

T:今は改善されていますが、最初は、最上階の屋根と天井の仕様のおかげで凄く暑かったんですね。それで、その仕様に関して、あちこちから苦情が出たのかしら。断熱タイプという屋根材の宣伝に来られたので、それを載せることにしました。そうすると、確かに涼しくなりました。置き式で、間を空気が通るようなパネルなんですね。それを置いて、だいぶ良くなりました。最初は暑いなと思いましたね。

N:どの部分ですか？

T:庇プラス屋根の部分です。以前は末端が薄く見えているだけで、屋根折版の最後の所が見えていただけだったんです。断熱材は入っていたけれども、何しろ暑くて大変でした。「えんがわ」部分以外は冷房を入れていないのですが、今は南北の風が通れば大丈夫ですね。それと、3 階が載ったので、2 階は今一番楽なんです。ですから、暑さ以外は特に問題は無かったですね。

N:富田さんは建築家として、林さんは都市計画家として、この M1 にどういう考え方や住まい方で対応して来られたのでしょうか？

T:建築家の立場ねえ。自分では、どこまでが住み手でどこからが建築家かと言うのは難しいですね。ちょっと区別がつかないけど。

N:最初の段階から、並べ方等も含めまして、このようなプランをお持ちだったということですよ。

T:そうですね。

N:そこから、一般の施主の方とは違っていたと思いますが、特別に「建築家の立場で」と言われても難しいかもしれませんね。

T:そうですね。

N:この質問は林さんにも是非伺いたかったのですが、街並みやコミュニティーと関係を作っていく上で、過去から現在までに、どのように M1 を捉えてらしたのか、という点について伺えればと思います。

T:古い家ではなくて、ですね？

N:ええ。M1 に変わってから、M1 であるが故に考えていらっしやったこと等ありますでしょうか？

T:そうですねえ。まあ、考えて今のような姿になったのかどうかわからないですけども、今はかなり街に対して開いている気がしています。夫の両親が存命の時には、2人で1階の右端列5ユニット及び真中列4ユニットの、計9ユニットを使っていました。2人の時はそれで良かったんですが、夫の父が亡くなって、母1人になると、9ユニットでは広すぎるので、真中列の4ユニットにキッチン等もつけて、1人で住めるようにしてくれということで、改装したんですね。そうすると、右端列の5ユニットがポカンと空いて、そこを母が世田谷の幹部をしていたYWCAの方や、他の地域の集まりのために使うように、とまず母が言い出して、最初はYWCAだけだったのが、それ以外の方も集まるようになって、そして母が亡くなってから、その遺志を継いで我々の娘がここで店をしましょう、ということになりました。娘としては、普通のカフェプラス地域の集まり場所として、やっていきたいということなんですね。元々門等も無くて、近所の子が来て遊んだりするような場所で、重厚な家ではないので、皆さん入りやすいという感じですね(笑)。今、カフェになっている所の入り口部分は、以前は60cm程度の低い腰窓で、玄関は別の所にあったのですが、その腰窓の部分壊して、下まで開けてデッキを作って、「えんがわ」にしたのですが、確かに開いているという感じにはなったと思います。

N:そうすると開きやすかったということでしょうか？

T:そうですね。

N:桁側が一番広いですからね。妻側ですと少し違っていただけかもしれませんね。

T:みんな、どこの家もそうになったら、街は住みやすいかないという気がしますけどね。防犯と言って、重厚な壁や門をつけてしまうとかえって危ないですね。

N:なるほど。そういう意味では、M1のこの開口部がこれだけとれるというのは、開いていくという意識が生まれやすかったということがあるんでしょうね。

T:そうですね。それはあると思いますね。凄くアジア的な形なんじゃないかと思いますね。西洋と言ったって色々あるけれども、壁式の建物で出来ている街で、開放と言っても構造的に上手いかないし。この間、2~3日前の新聞に、スマトラ島での津波の後、アチェという所で、元々喫茶店をやっていた人が「TSUNAMI」という喫茶店を再開したという話が出て居ましたが、パタパタとあばら屋風な所が、我が家に似ているなという感じがしました。

N:確かに、壊れてもすぐに組み立てることが出来たりとか、作る人の気持ちを開かせてあ

げるような要素があるんでしょうね。

T:そうですね。以前、ここに建っていた洋館は、庭まではいつも門が開いていて、誰でも入れるようになっていたんですが、洋館風に作っていた家でしたので、どこからでも入れるという訳ではなくて、やはりそういう家に比べると、現在のこの家は随分開放的だと思いますね。

N:M1 が Docomomo の 100 選の 100 件目に選ばれたということについては、どのように感じられますでしょうか？

T:100 件目なんですか？

N:ちょうど 100 件目なんです。

T:そうですか。それは何だかめでたい感じ（笑）。

F:時代的にもちょうど 1970 年で・・・。

N:もちろん工業化住宅としても 1 件だけです。選考理由の中で非常に印象的だったのが、M1 には社会改革性・変革性のようなものが思想的にあると。つまり、何も無い中で、構造自体が残りつづけられるようなものがあつたのではないかと。そういう意味で、量産することによって、多くの人たちに供給することができる。その中で、大野さんの思想では、社会の構造を変えていきたいという意志があつたのではないかと思います。それは建物というよりは、街並みであつたりとか、住むということ自体の構造、というようなことだつた気がします。M1 に住まれて、自分の家が近代建築の 100 選に選ばれたということに対して、建築家として、あるいは施主としてどのように感じられますでしょうか？

T:それは本当に嬉しいと思いますね。大野さんのためにもおめでたいと思いますし、いつもいいなと思っていても、特にどこからも評価されたことが無いので、良い機会だと思いますね。

そう言えば、困つた点というのが天井の高さですね。うちは 2,250 なのですが、その後、2,400 に増えたらいいですね。今、うちの天井は色々やり直した関係で、2,250 よりも少し下がっていますが、もう少し高ければ良いと思いました。

N:外枠で 2,700 ですから、当時の道路交通法でトラックに載せられるサイズだつたんだと思うんですね。

T:それで、2 階は吹き抜けにしちやつたんです。

N:今後も M1 に住まれていく中で、改修等のアイデアや予定等がありますでしょうか？

T:今の所無いですね。

N:または、M1 を使って作品を作る等の発想はありますか？

T:まあ、使えるかもしれないと思いますが、M1 は今も作ってらっしゃいますか？

N:ええ、M3 というシリーズはそうですけれども、再築システムというサービスを積水で作っておりまして、1 度使われたもので、それを骨組みだけにして、また新しい施主の方へリユースするというプロジェクトをやっておりまして、僕自身も M1 のリユースをアートプロジェクトに使えるのではないかと、ということで、大学の研究室で 14 ユニットを購入しま

して、学生と一緒に、フレームの中で何を作れるかということを試みたりしています。住宅という、人が住むという用途だけではない要素が何かあるのではないかと、思いまして。

T:それは面白そうですね。私たちも、もし広い土地があれば、M1 をつかって、もっと縦・横を増やして、全部室内にするのではなくて、半分は吹きさらしの半屋外的な所ができたらいいと思いますけどね。それを作るには、M1 は向いているし、すぐにできちゃうなという気がしますけどね。

N:それはやはり、空間を掴んで置いていく積木のような感覚でしょうか？それとも構造的な問題でしょうか？

T:積木というよりも柱・梁だけということですね。M1 を見ていると、つい積木と思ってしまっても、面材は構造的な荷重を受けていないんですよね。だから、面材を全部取り払って、柱・梁だけのユニットを 100 個位置くと何かできそうな気がしますね。そこに、どうしても必要な所にだけ壁をつければいい、と。

N:それは是非やりたいですね。

T:それから、外壁の色がね、初めは誰にでも良いと思われるような、無難なベージュやクリームのような色だったんですね。最初は仕方ないので、そのままにしておいて、それから約 1 年経って、若草色のような色に替えて、しばらくして、どうもそれも寂しいということで、濃いピンクのような色にしたんですね。赤い系統の色は早く褪せるので、1 度塗り直して、もう 1 回という時に、「えんがわ」ができたので黄色に替えたんですけども、色々な色にできるところが楽しいですね。

N:住まわれている方の資料を見せて頂いても、様々な色に塗られている方が結構いらしゃいますね。

T:そういう風にしたくなるんですね。何色でもいいという感じがあるから面白いですね。

N:最後に、富田さんにとって M1 とはどのような存在だったのでしょうか？

T:そうねえ。凄く気が楽な、自由な空間と言うのかしら。かしこまらなくてよくて、家中掲示板という感じで（笑）。疲れないですね。

N:今日は、林さんはいらっしゃらないですが、日頃お話しになる中で、M1 についてどのようにおっしゃっていたのでしょうか？

T:彼は町づくりについて良く考えていますので、町に開いていくということに関しては、この構造でとても良かったと言っていると思いますけど。

F:M1 を購入された時に、鉄骨のラーメン構造のユニットにどこまで部品を搭載して購入されたのか、ということが、外観をパッと見ただけではわからなかったのですが、一般的な居住者の方の場合、内・外装や設備類も含めて、全て搭載された状態で購入されていると思うのですが、林さんや富田さんはいかがだったのでしょうか？

T:一般と同じです。台所もお風呂もみんなついてきた（笑）。ご近所の方がね、ビックリされたみたいですよ。まだ町が起きる前に、工場から早朝やってきて、あちこちの小道に潜

んでいて、次は何番・何番という形でやってきたらしい（笑）。私はその噂しか聞いていないんですけどね。1階を置いて、2階をクレーン車で置いていく際に、「台所が来た」とか「次はお風呂だ」というのが近所の方には見えていたみたいなんですね（笑）。

N:そうすると、最初はメーカー仕様のものを購入されて、そこから直していかれたんですか？

T:そうですね。しばらくはそのままでした。

N:そうすると、住みながら替えていかれたということですね。

T:5 ユニットが連続していたりするの、購入当初からのものでしたけど。購入する際に、凄くたくさん選択肢があったんですね。それで、メーカーの方から「お買い上げ下さって」と言われるんですね。「今週中にお買い上げ頂けると安くて」、とかおっしゃって、その週で決まっちゃった（笑）。

F:開発者の方にインタビューした際に、家を「建てる」のではなくて、「作る」とか「買う」というように、本当にインダストリアル・デザインのような感覚に近い作り方をされた、とおっしゃっていたので、「お買い上げ下さって」という言い方は割と正確なのではないかと思えますね。

T:そういう感じですね。冷蔵庫や何かと同じような感覚でね。

N:今日はどうもありがとうございました。